EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO
えど友

No.66
2012
（平成 24 年）
3 － 4

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

エッフェル塔の資料や館蔵品の初公開も（ザ・タワー）… 1〜2
シンボルマークを決定……2
友の会セミナー**「江戸の総鎮守・神田明神の祭礼と文化」**…3
友の会セミナー**「増上寺徳川家霊廟の世界」**……4
友の会特別観覧会 **大河ドラマ 50 年特別展「平清盛」**…5
江戸博クリップ**「江戸東京たてもの園で春先に咲く花」**…5
24 年度の[古文書講座]の概要……6
えど友サークルだより / 会議・会合日誌……7
えど友プラザ……8〜9
江戸検定を検定する / 荷風流散策のエッセンス……8
志ん生の大津絵「冬の夜」と「消防殉職者慰霊祭」……9
曲亭馬琴の『羈旅慢録』より……9
落語で江戸散歩…㉕**[加賀の千代]**……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11〜12

エッフェル塔の資料や館蔵品の初公開も

東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー〜都市と塔のものがたり〜」

担当の岩城紀子学芸員に聞く

―この展覧会を企画されたきっかけをお聞かせ下さい。

岩城― 5、6 年前にこの墨田区の地元に新しい電波塔が建つ、それも 600 m を超える世界一の塔が建つという発表がされて、それまで私自身にとっても生まれた時には東京タワーは建っていましたし、都市の中の塔はあってあたりまえのものでした。新しい塔が建つ過程を体験することができるということが企画のきっかけになりました。凌雲閣（浅草十二階）や東京タワーなどが建った時に人々がどのように思ったのか、新しく出来てからどのように付き合ったのかなということを調べていくうちに展覧会として企画したいなあと思うようになりました。

―東京タワーより前の塔ということで展覧会を展開されますが、どの時代の塔を取り上げられるのでしょうか。

岩城― 19 世紀から 20 世紀にかけての都市の中の塔ということにテーマをしぼっていますが、まず最初に都市の中にある塔の起源から西洋文化圏として「バベルの塔」と日本では仏教文化圏の塔「仏塔」である三重塔、五重塔をスタートとして取り上げてみました。

江戸東京博物館ですので特に「江戸から東京へ」が中心になりますが、江戸は塔がほとんどない都市でした。仏塔はありましたが、いわゆる人が登って周りを見る塔は前近代には登場してこなかったと考えています。天守閣は高いところに登って周りを見ることはできましたが、それは都市を防衛するため戦略的に見張る限られた人しか登ることが許されないものでした。仏塔も構造上人が登れないものでした。一般の人たちが楽しむために登るような塔が生まれる前史として紹介しています。

岩城紀子学芸員

その後明治維新を経て近代に入り建物の高さ制限が解除され、すなわち高いところからの見晴しが一般の人たちに開放され登ってみることを楽しむ塔（タワー）がいろいろと出現するという展開になりました。19 世紀に入って取り上げる塔としてはエッフェル塔があると思います。世界的にみても明治 22 年（1889）パリ万博においてパリという古い街に鉄と電気でできた近代の塔として登場しています。翌年東京に凌雲閣が建てられたのもエッフェル塔の影響なしには考えられません。明治 45 年（1912）には大阪に初代の通天閣が建てられました。19 世紀末から 20 世紀初頭のパリ、東京、大阪の各都市の眺望を楽しむ塔を人々の記憶ととも

に紹介します。

引き続いて、新しい時代の塔としての東京タワー、二代目通天閣を取り上げ、エピローグとしてこれから建てられる塔（タワー）はということで東京スカイツリー®を紹介しています。

―展覧会で取り上げられている外国の塔はどのようなものですか

岩城―今回はエッフェル塔にしぼって紹介させていただきます。オルセー美術館、フランス国立文書館、フランス国立図書館およびエッフェル塔開発会社からエッフェル塔関係の資料を多数ご紹介します。またバベルの塔の銅版画もフランスのものです。

―塔を建てている途中での写真などもみることができるということですが。

岩城―エッフェル塔も建てている間の連続定点観測写真はオルセー美術館からお借りしています。

―目玉としての展示はありますか。

岩城―エッフェル塔関係の資料を別として、他の塔の資料は江戸東京博物館が持っている館蔵資料で８、９割を占めています。特に凌雲閣資料は喜多川コレクションによるものです。館蔵品の初展示のものも多いのでご期待下さい。

風船乗評判高楼（ふうせんのり　うわさのたかどの）
1891 年（明治 24） 歌川国貞（３代）/ 画　江戸東京博物館蔵

―チラシで紹介されている「えどはくタワーズ」とはどのようなものですか。

岩城―平面で動きのない静かな展示のなかで動きのあるものが加わることによりリアルな「生」な体験をすることができるのではないかという発想で、新しい試みとして企画しました。企画をする中で、タワーのカブリモノをしたダンサーが会場の近くでパフォーマンスなどしていると子どもたちも喜んでくれるのではないかという発想です。具体的な形となり、カブリモノ作家のニシハラ★ノリオさんにタワーのカブリモノを作ってもらい、ダンサーに新しく作詞作曲してもらった歌にあわせて動くアートとしてパフォーマンスをしてもらいます。特別展の会期中博物館のあちこちで活動します。活動のないときはタワーのカブリモノは特別展の会場の入口に飾りたいと思っています。またニシハラさんによるワークショップも開催されます。歴史系博物館としてはめずらしい試みなので楽しみにしてください。

この展覧会は、東京スカイツリー®の完成を記念して開催されます。過去に建てられた塔の都市の中での位置をご紹介することで新しい塔が都市の中でどうあるべきかを考えるきっかけになればと思います。

【聞き手】文：広報部会・佐藤美代子
写真：同・福島信一

シンボルマークを決定

昨年 11 月 1 日発行の『えど友』64 号誌上で募集しました友の会のシンボルマークには 7 人のかたから計 33 点のご応募をいただき、ありがとうございました。

役員会（15 人）で選定を進めてきました。比較検討しやすいように全作品を同程度の大きさに整え、33 作品を 1 枚(A3)にコピーしました。その中から各人が 1 位、2 位、3 位と順位を付けて 3 点ずつ選び、1 位に 3 ポイント、2 位に 2 ポイント、3 位に 1 ポイントを付して集計した結果は次のとおりです。

最優秀賞（1 位）　作品 No.1
**　24 ポイント　　藤井文乃さん**
佳作（2 位）　作品 No.20
**　12 ポイント　　匿名**
佳作（3 位）　作品 No.31
**　10 ポイント　　国定美津子さん**

4 位以下は省略します。以上により、作品 No.1 を友の会のシンボルマークとして採用することに決定しました。今後作者の補作を経たうえ友の会の印刷物等に使用していく予定です。後日表彰式を予定しています。匿名の方は事務局まで申し出てください。

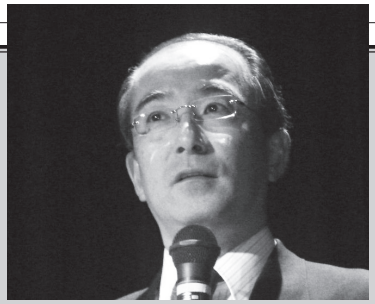
【作者説明】入り江と朱引絵と大川（隅田川）と江戸城です。江戸東京博物館がやや横長のマークなので縦長にしました。アルファベットの**e**（え）と**D**（ど）に見えませんか？

藤井文乃さんの作品

第 112 回　江戸東京博物館友の会セミナー（2011/12/24）

「江戸の総鎮守・神田明神の祭礼と文化」

講師　清水祥彦さん（神田明神権宮司）



江戸を学ぶにあたり 1,200 年の歴史がある神田明神を知ることは必須条件の一つであると思います。

海外の災害時には略奪・暴動が起こったと聞いています。それに対して東日本大震災では厳しい状況でもパニックに陥らず、助け合い整然と行動する国民であったと海外メディアはたたえていました。わたしたちは改めて日本の文化、治安の良さを認識したものです。

祭りと目に見えない本物の価値

わたしたちの不安定な時代の日常生活の中、そこに神社の存在意義があるのです。祭り・神社は社会の安定装置なのです。祭りとは一定の儀礼様式の中で隣の人と喜び・幸せを共有し合う儀式なのです。日本人は一人よければよしではなく、すべての人が喜び合う世界を共有する社会を営んできたのです。そうした歴史が江戸時代、もっと古くから心の中に受け継がれてきました。その一つの表現様式が祭りという文化です。

お祭りの語源ですが、一つは「待つ」、神の訪れを待つ、すなわち古代から連綿と受け継がれてきた神話的な世界観を再確認する儀礼が祭りといえます。祭りは地域の文化資源です。江戸博の展示の中にもあるように江戸の人々が貧しい中にも非常に豊かな精神文化を営んできた伝統を、祭りを通して再確認していただきたいと思います。

ポスト近代化工業社会は金で買えないもの、目に見えない本物の価値、そういうものを求め合う成熟した社会です。目に見えない本物の価値とはどういうものなのでしょうか。人間としての幸せ、豊さ、満足感を祭りというキーワードを通して考えてみたいと思うのです。

日本的価値観こそが世界の尊敬を集めます。祭りや神社を見直していきながら、新しい日本の社会のあり方を考えなければいけない時代だと思います。

神社とは何か

８万あると言われる神社。神社には経典もないのですが、四つの価値観があります。①敬神崇祖、②浄明正直、③共生、④言挙（ことあ）げせじです。

この 160 年間で江戸東京は３回も壊滅的被害を受けました（安政大地震、関東大震災、東京大空襲）。これらの被害から見事に復興してきた事実を忘れてはなりません。

今年５月の神田祭は中止となりましたが、シンポジウム「鎮守の杜からの祈り・日本神話と災害教訓に学ぶ夕べ」を開催しました。日本人が受け継いできた美しい神話を改めて現代社会の中で学ぶことにより復興への勇気を学ぶことができると考えたのです。神社、祭りは現代社会に対応しながら営まれることで社会的意義を持ちます。

「名所江戸百景・神田明神曙之景」は安政大地震の後広重により描かれたもので、初日の出、希望の朝日を入れ、若水により蘇（よみがえ）らせています。正面の木は御神木と思われ、広重は二重三重のメッセージを込めて、被災者が立ち直ることを祈ったと考えられます。神田明神も 10 月 30 日に東北の方々を招いてお御輿（みこし）を出しエールを送りました。

神田明神の由緒と神田祭

神田明神は天平２年(730)創建とされています。慶長５年(1600)関が原の戦いの時、徳川家康公が江戸総鎮守の神田明神で戦勝祈願を受けました。合戦は９月 15 日と伝えられていますが、この日は神田祭の日でした。

神田明神の祭神は、一の宮・だいこく様、二の宮・えびす様、三の宮・まさかど様です。神田祭は江戸城に入ることが許された将軍様上覧の祭りで２年に一度行われます。祭りは常に新しく美しく変革してきました。

神田祭では100基の神輿が出ますが江戸時代には２基でした。当時は山車（だし）が中心でしたが、しだいに電線がじゃまになり地方へ売ってしまいました。

神田祭りのパレードはショーパレードであり、ディズニーランドと同じことをして楽しんできました。神田祭は不変のものを繰り返してきたのではなく時代とともに変化してきたと考えます。

また神田明神は日本初の大規模な鉄筋コンクリート製の社殿です。神社というのは死と再生の文化を繰り返してきた場所なのです。

日本人の宗教観とキーン氏の言葉

ある調査では、宗教を信じてないが 72%で無宗教です。しかし先祖を敬う 94%、墓参 71%、初詣で 73%となっています。

最後にドナルド・キーン氏の言葉を紹介します。「3 月 11 日の大震災の直後、放射能の被害を恐れた外国人が次々に日本を離れました。私はこのニュースを読みながら怒りがこみ上げてきたんです。私はそんな外国人とは違うということを、明確な形で日本人に示したいと考えたんです。家族や家を失ってもじっと耐え忍ぶ人たちの姿を見て、この人たちと一緒にいたいと思いました。自分に必要なのは、この国とともに生き、ともに死ぬことだと思いました。この優秀な日本民族は、大震災という試練を乗り越えてもっと立派になると確信しています」。

どうか今日学ばれたことを皆様の口から若い人たちに伝えてください。

【記録】文・写真：広報部会・天野哲夫

第113回　江戸東京博物館友の会セミナー（2012／1／28）

「増上寺徳川家霊廟の世界」

講師　髙山優さん（港区立港郷土資料館学芸員）

昭和20年(1945)、3月と5月の東京空襲によって芝増上寺にあった徳川家霊廟はほぼ壊滅しました。もしこれらの建造物群が今に残っていたとすれば、日光東照宮をもはるかにしのぐ豪壮な景観を目の当たりにできたことでしょう。

増上寺と家康

増上寺は正しくは三縁山広度院増上寺といい、元は真言宗の寺で、名を光明寺といいました。浄土宗に改宗した後、明徳4年(1393)に増上寺と改称しました。家康が江戸入府を果たしたとされる天正18年(1590)、家康は「大将たらん者、菩提所なきは死を忘るるに似たり」と入府翌日に増上寺を菩提寺と定めたといわれています。これは時の住職源誉存応上人に家康が帰依し師壇関係を結んだためでした。ちなみに寛永寺にも将軍家のお墓が営まれますが、寛永寺は菩提所とはいわず、祈祷所といわれています。慶長3年(1598)、増上寺は、創建地である麹町貝塚(現、千代田区平河町付近)から芝に移転しました。史料によれば、慶長10年(1605)頃から本格的に整備が始まり同16年(1611)頃にはいまに伝わる伽藍が整ったとされています。増上寺は浄土宗の東の総本山といわれ、江戸時代には三つの大きな役割を担っていました。一つは浄土宗僧侶の養成機関としてのセンター的な役割、また一つは寺社奉行からの命令伝達の中枢を担う機能、そして一番重要なのが徳川将軍家の菩提所としての役割でした。

増上寺に葬られた将軍

増上寺に埋葬された徳川将軍は二代秀忠、六代家宣、七代家継、九代家重、十二代家慶、十四代家茂の6人です。

初代家康、三代家光の2人は日光、最後の将軍慶喜は谷中、そしてほかの6人は寛永寺に埋葬されました。慶長年間に整備された増上寺に最初に埋葬された徳川将軍家の人は江でした。寛永3年(1626)に死去した江は“麻布野”というところで荼毘に付されます。増上寺には将軍6人とその縁者32人の、合わせて38人が埋葬されていますが、江は唯一火葬で埋葬されました。

台徳院（二代将軍秀忠）霊廟の造営

秀忠は江の死の6年後、寛永9年(1632)に亡くなり、江とともに増上寺に葬られます。秀忠は正月24日に死去、その翌日幕府は増上寺に廟所を作るための土地見分を行い、翌26日には土井利勝が造営総奉行に任命され、寛永期の日本を代表する職人達が集められました。着工は2月10日頃、竣工時期は諸説ありますが、霊廟に奉献された燈籠の奉献日は寛永9年7月24日が圧倒的に多いことから、この頃には霊廟がおおむねできあがったと考えられます。秀忠のあと、六代、七代は増上寺に霊廟が造営されましたが、八代吉宗の時代に新しい霊廟の造営が禁止されます。それ以後は、増上寺、寛永寺ともに新しい霊廟がつくられることはなく、すでにある霊廟に合祀となりました。秀忠の廟は増上寺本堂の南側、7世紀頃の築造と言われる丸山古墳周辺を造成してつくられ、北側には5人の将軍の墓所が造営されました。台徳院の宝塔は唯一木造であったため、戦災で焼失しました。

将軍家霊廟の変貌

将軍家霊廟は一般庶民にとっては閉ざされた空間でしたが、文久2年(1862)に書かれた商人の日記「在府中日記」には霊廟を見学したことがつづられています。将軍や大名であれば、まず台徳院に行くべきところ、この人は順番に関係なく参拝し、台徳院宝塔の近くまでも行っていますので、すでにこの頃には、ある程度の範囲で開放されつつあったのかも知れません。幕末には外国人も霊廟に入れるような情況になりつつありました。イギリス人写真家ベアトは明治元年(1868)に霊廟を撮影しています。明治に入ると、増上寺の子院や学寮は公共の機関によって蚕食されます。廃仏毀釈などもあり、広大な寺域は縮小していきます。さらに、江戸時代の増上寺にとって唯一の檀家であった徳川家との関係も変化します。こうした時代の移り変わりが、広大な墓所の維持管理を困難なものにしていったと思われます。

まとめ

台徳院霊廟は江戸につくられた最初の将軍墓であることに、近世史上の歴史的意義があります。寛永期の最も優れた建築技法や技芸の結晶が台徳院霊廟といえます。今に残る日光東照宮は、この台徳院霊廟をモデルにして、家光と時の幕府が威信をかけて整備させたものです。また将軍家の霊廟は、戦前は国宝指定を受けていましたが、地下の埋葬施設は対象外でした。本来霊廟は、地下にある埋葬施設と地上の建造物と一体のものです。地上だけを保護するのみで霊廟を守るということになるのか、霊廟は文化財保存を考えるときの究極の資源の一つともいえます。

【記録】文・　広報部会：中村貞子
写真・　広報部会：佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（2012/1/6）

NHK大河ドラマ50年特別展「平 清盛」

1月8日のNHK大河ドラマ放映に先立ち、1月2日から始まった特別展「平清盛」の友の会特別観覧会が1月6日に開催され、正月気分も覚めやらぬ中、141人が参加しました。まず17時から、1階ホールで担当学芸員斉藤慎一さんの見どころ解説が行われ、展示順に清盛の一生の紹介とともにその不明点も強調されました。

第1章は「平氏隆盛の足跡」。清盛は白河院近臣である忠盛の嫡男、母は白河院の身近にいた女性を忠盛が妻として賜ったとされます。実父は白河院、母は祇園女御の妹ともいわれ清盛の実像は分からず、悪役と神格化の二面性があります。11～12世紀は考古的な遺物が乏しく、末法思想の時勢でもあり歴史的解明は困難な状況だそうです。

第2章は「清盛を巡る人々」。朝廷の実力者、鳥羽院・崇徳院・後白河院などの、天皇や摂関家の肖像や絵巻はまさに保元・平治・源平合戦やその後の立役者たる平安末から鎌倉末までの人物となっています。

第3章は「平氏の守り神―厳島神社」。清盛が久安2年(1146)安芸守に就任後、家門の祭神として仁安3年(1168)に社殿を造営した厳島神社です。

第4章は「平氏の時代と新たな文化」。平氏勢力拡大に伴い造寺造仏がなされましたが、戦乱で多くが焼失。仏教美術を通して平氏ゆかりの資料に加え、宋との交流による影響や、さらに新たに生まれた文化も注目されます。

第5章は「平家物語の世界」。絶頂期から源平合戦後の平氏滅亡まで、さらには源氏の義仲・義経・勝者頼朝までが滅び行く過程も、物語として後世に伝えられていきます。

解説を聞いた後、いよいよ特別展会場へ向かいます。大河ドラマでは、初めての武士の台頭による「時代への挑戦者」としての平清盛が描かれていますが、この特別展では、一族の繁栄を象徴する数々の書・美術・武具・工芸品が展示されていました。

会場入口でザザーという波音とともに、西海の世界へ誘われます。最初に目につくのが「平清盛請文」。清盛自筆の古文書で、厚紙の折帖に武士の消息などの古筆を貼り込んだ前田家の「手鑑」の一篇です。次に「仏舎利相承系図」は清盛の生母を祇園女御の妹であると記す貴重品。そして、「公卿補任」には清盛が保元4年(1159)正三位に叙すとの記述がありました。

第2章では、重要文化財の「天子摂関御影」絵巻が必見でしょうか。天皇家では、院政開始後の鳥羽院、保元・平治の乱の崇徳院、後白河院、二条院が描かれ、摂関家では、最初の藤原忠通に向き合う形で、長男基実（近衛）・二男基房(松殿)の坐像が描かれ、以下一族の像が続きます。

第3章では、世界遺産厳島神社の至宝の内、国宝は33点、うち「平家納経」は14点展示されました。

第4章の「年中行事絵巻」は、当初は後白河法皇の命で制作されたもの。この絵巻の誤りを指摘した前関白基房の「手直し図」を法皇が大変お気に召し、蓮華王院に納めましたが、後年焼失したとの記録もあります。

第5章の「平家琵琶」「源平合戦図屏風」を含め、どれも各地から集められた見応えのある作品でした。

【取材】文・写真：広報部会・国定美津子

江戸博クリップ

「江戸東京たてもの園で春先に咲く花」

管理課管理係　高橋美恵

4月から管理係で事務を行っております。それまでは分館の江戸東京たてもの園に5年間おりました。たてもの園は復元建造物を展示した野外博物館ですが、その敷地内にはさまざまな植物が植えられていて、来館者の目を楽しませてくれます。ここでは、春先に咲く花をご紹介いたします。

3月から5月は芽吹き、花が咲き、風景が一変します。この時期はぜひ会水庵の東側にある「武蔵野のハケ」を歩いてみてください。武蔵野台地の段丘のある場所はハケといわれ、湧水がでます。そのハケを小さな区画ですが、流水を用いたりして再現しています。

「武蔵野のハケ」には山野草が植えられていて、3月にシュンラン、ユキワリソウ、カタクリが咲き始め、日を追うごとにニリンソウ、ヤマブキソウと次々花が咲き始めて春を感じられます。群生しているわけではありませんので、野山で花を探すように眺めていただければと思います。

3月末にはサクラが咲き始めます。たてもの園は都立小金井公園の中にあり、小金井公園はサクラが有名です。園内の高橋是清邸や三井八郎右衛門邸の2階から小金井公園のサクラを眺めるのもおすすめですし、三井邸の庭のシダレザクラは建物と相まって素敵な空間を創り出しています。園内は開花時期の遅いサトザクラもあり、長い期間サクラを楽しめます。

野外博物館ならではの季節を感じる展示を楽しんでいただければと思います。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

平成24年度の［古文書講座］の概要

ご好評をいただいている古文書講座の24年度の概要を3人の講師にお書きいただきましたので、ご紹介します。多数の皆さんのご参加をお待ちしています（申込方法などは11，12ページ参照）。

◆入門編（担当：田中潤講師）

（学習院大学文学部史学科助教／近世の門跡寺院を中核とした朝廷史・仏教史・文化史を研究）

○受講対象者・レベル：本講座（入門編）は、初めて江戸時代の古文書（くずし字）を読もうとしている方を対象としています。また、既に古文書に親しんでおられる方で、初歩から古文書の勉強の仕方を復習するために受講されたいという方も歓迎します。

○講座の進め方：基本的に3回の講座で一つの事例に則した古文書を読んでいきます。1回目にテキストを配布し、次回以降は解読の予習をした上で受講して頂きたいと思います。本講座では、典型的なくずし方の文字で書かれた古文書をテキストとして、翻刻（解読）の仕方、辞書の使い方、意味のとり方を中心に、丁寧に、ゆっくりと進めていきます。その際、古文書の読み方として、①文字から読む、②文脈から読む、③周辺知識から読むという三段階の読み方を念頭に置きながら、効率的な江戸時代のくずし字の覚え方を紹介していきます。また、テキストに関連した博物館・美術館で展示されている書跡に関する展示の見方なども適宜紹介し、開催中の展覧会の紹介もしたいと思います。

○使用する史料および内容の概略：基本的には「旧幕引継書」に含まれる江戸に関連する史料をテキストとして講読します。「旧幕引継書」とは、江戸幕府の多様な役所で作成・継承された記録類のうち、明治維新後に東京府庁に引き継がれ、今日に伝えられたものです。江戸町奉行所関係の記録を中心として、その他の役所のものも含まれており、江戸の政治・行政・社会を学ぶ上で重要な史料群です。

◆初級編（担当：吉成香澄講師）

（学習院大学大学院史学専攻／最近力を入れている研究テーマ：将軍姫君の儀礼上の贈答関係の範囲・水戸藩財政における幕府の経済的支援と藩主家族の政治的関係について）

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的なくずし字が読める方を対象にしています。

○講座の進め方：初回に全回分のテキストを配布し、各回でレジュメを配布します。各回ではテキストを読みあげて適宜くずし字の解説を行います。江戸時代の古文書を読むにあたり、抑えておきたい字などを対象とし、基礎的なものについては必要最低限にとどめます。本講座では、くずし字の解説だけでなく、史料に記された内容の解釈や解説をより重点的にすすめていきます。そうすることで、江戸幕府の幕臣や大名についての知識を広め、史料への理解を深めていきたいと思います。テキストの対象は、江戸城や大名屋敷など武家の生活範囲のことが中心となります。また、古文書の形態や用語などについても、適宜解説を行います。

○使用する史料：『丹鶴城旧蔵幕府史料』（ゆまに書房）、『内閣文庫所蔵史籍叢刊』（汲古書院）などの幕府史料。

○史料の内容：幕府の諸役所で作成された記録類から、御触や先例などを取り上げます。

◆中級編（担当：長坂良宏講師）

（学習院大学大学院史学専攻／最近力を入れている研究テーマ：朝幕関係史、その中でも近世後期の朝廷と幕府の関係について）

○受講対象者・レベル：古文書の基本的な読み方がわかり、ある程度くずし字が読める方。

○講座の進め方：最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行っていきます。使用史料は事前に1期分（計3回分）を一括して配布し、受講者の方々がご家庭で予習されてくることを前提に進めていきます。

○使用史料：江戸町奉行所の史料を中心とした「旧幕引継書」を基本史料として、関連史料も適宜取り入れていきたいと考えています。近年刊行が終わった『旧丹鶴城蔵書幕府書類』も積極的に利用していきたいと思います。またその史料に関係ある史料やより理解を深めるのに必要な他の史料なども多く取り上げます。

○史料の内容：基本的には江戸に関する史料や幕府史料を取り上げます。昨年度は、江戸の町名主について、風聞集からみる江戸の情報について、『旧丹鶴城蔵書幕府書類』所収史料などを取り上げました。今年度は従来と同じように江戸に関する史料や幕府史料などを中心に行う予定です。受講者の方々のご要望あるいは諸般の事情などによっては変更もございますが、その点はご了承いただければと思います。

・・・・・お知らせ・・・・・・

友の会事務局長の末永俊幸さんが一身上の都合により1月末で辞任しました。後任は、「友の会規約第8条4」により2月14日の役員会で大澤憲一さん（事業部会）を選出し、同日就任しました。

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸東京を巡る会**：12月7日(水)「大名屋敷跡と名刹を訪ねて（港区編Ⅴ）」と題して、妙定院、日向佐土原藩島津淡路守屋敷跡（三井倶楽部）、伊予松山藩松平隠岐守勝善屋敷跡（現イタリア大使館）、當光寺（渡辺綱の寺）などをめぐった。参加39人。

◆**落語と講談を楽しむ会**：12月12日(月)山内啓巳さんが月番で、落語ビデオ「掛取万歳」(六代目三遊亭円生)、「芝浜」(柳家小三治）といずれも年の瀬にふさわしい演目を鑑賞した。参加者19人。1月24日(火)田中文彬さんの月番で「フランキー堺の奇才を探る」と題して、テープ「寄席紳士録」(ナレーション）とDVD「映画・幕末太陽傳」(主演）を鑑賞し、フランキー堺の芸を堪能した。参加者19人。

◆**藩史研究会**：12月9日(金)当サークル会員・故増山克己さんの調査研究を受け継いだ市川勝、山口義正、吉井隆一さんの3人の共同補足調査の結果を市川さんが「徳川十六神将の一人　米津氏の歴史」と題して発表した。詳細な現地調査にもとづくビジュアルな発表で、米津氏への理解を深めた。参加者は25人。1月13日(金)前月に続き、市川さん、山口さん、吉井さんによる「三河吉田藩」の研究発表が行われた。大河内松平氏の軌跡を踏まえその最終回との位置付けで、周到な準備のもときちんとした調査であることがよく理解できた。参加者20人。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：12月8日(木)、1月12日(木)、27日(金)に例会を開催。参加者は各7、8、7人。

◆**神田川を歩き楽しむ会**：12月22日(木)と25日(日)に第24回として、礫川公園、常泉寺、牛天神、荻の舎跡経由で白鳥橋に出て、小石川橋（日本橋川分岐点）まで神田川沿いに歩いた。途中、筑土八幡、赤城神社、寺内公園、神楽坂路地裏、善国寺などを参拝あるいは見学した。また飯田橋大歩道橋からは神田川と外堀の合流の状態、三又状の船河原橋の架かり具合を見学した。参加者は各47人、30人。1月26日(木)に第25回として、江戸博会議室で「江戸名所図会に見る神田川」をテーマに講演会を行った。講師は当サークルのメンバーで『江戸名所図会』輪読会にも属している清水昌紘さん（井の頭池、大宮八幡)、舩津恭子さん（関口大洗堰、赤城神社)、小林弘明さん（湯島聖堂、三崎稲荷）の3人で、詳細な説明に一同聞き入った。参加者は68人。

◆**『江戸名所図会』輪読会**：12月19日(月)大澤憲一さんの担当で、品川のお寺のうちよく知られた本妙国寺、品川寺、海晏寺について読み、活発な議論を行った。参加者19人。1月16日(月）吉川政雄さんの担当で、鮫洲明神から荒蘭崎までを読み、詳細な説明があり、活発な討論が行なわれた。参加者21人。

❖　❖　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください（ただし、輪読系の2サークルと「落語と講談を楽しむ会」については定員に欠員が出たときに先着順で参加いただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2011／12～2012／1

◆**役員会**

12月13日(火)14時開催。来年度の総会開催日程表の確認、三部会合同会議の予定、パソコン等予定外購入についての報告があった。出席者12人。

1月10日(火)13時開催。検討チームによる懸案事項の推進について確認した。総会に備え、各部会から今年度活動報告と来年度活動計画案を次回報告することとした。出席者14人。

◆**事業部会**

12月6日(火)16時開催。11月の事業報告および今後の事業計画を確認した。セミナー受付の合理化について検討した。出席者20人。

1月10日(火)16時開催。12月と1月の事業報告および今後の事業計画を確認した。会員からの要望に対する回答を現時点で確認した。出席者21人。

◆**広報部会**

12月16日(金)14時開催。『えど友』65号の進行状況を確認した。ホームページ担当者より問題点と対応策について指摘があった。出席者10人。

1月20日(金)14時5分開催。『えど友』66号の進行状況を確認した。校正作業のルールを作ることを決定した。出席者9人。

◆**総務部会**

12月27日(火)13時開催。『えど友』65号およびチラシなど9点の発送業務を行った。三部会合同会議につき新企画の検討をした。出席者22人。

1月24日(火)13時開催。今後の活動日程および担当者の確認、三部会の参加確認、を行った。出席者21人。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

A、Bグループとも12月1日（木)、15日（木)、1月5日（木)、19日（木）に例会開催。出席者は（A）各8、8、10、9人、（B）各10、10、(1月5日は休み)、10人。

えど友プラザ

～友の会会員の投稿欄～

江戸検定を検定する

下永博道

友の会の皆さんは「江戸文化歴史検定」はよくご存知で、あるいは受験された方も多いことと思います。毎年文化の日ごろに実施され、昨年は第６回でした。私は第１回、いやその前の試し検定から参加して今回やっと一級の認定証をいただきました。

ここでは出されたいくつかの問題について自分なりの意見を記します。読んでいただいた方と話し合いの機会があれば議論もしたいと思っています。

【問61】「相撲番付には現在でも「蒙御免」の文字が入れられていますが、これは江戸時代に勧進相撲の興行を幕府から許可されたことの名残です。江戸時代に勧進相撲を許可したのは幕府のどの役職でしょう」

い）大目付　　ろ）町奉行

は）勘定奉行　に）寺社奉行

検定問題はこのように４択形式で設問は90問です。正解は寺社奉行、知っていないとできない良い問題ですが、受験者はよく勉強して正答率は95%です。ここではむしろ「蒙御免」の意味を問うのはどうでしょうか？

【問100】「下の絵は、長谷川雪旦が描いたもので、江戸の年中行事などをまとめた書物の挿絵です。『江戸名所図会』でも知られる齋藤月岑が編纂した、この本の題名は何でしょう？　漢字５字で書いてください（絵は省略）」

10問はこのように筆記での回答となるのですが、この問題、一級を受けるくらいの人は絵を見なくても「はは、トウトサイジキだな」と思うはずで、これを漢字５文字で書けばよいのです。「東都歳時記」でいいだろう？…残念、「東都歳事記」が正解なのです。

つまり時と事の違いがあり、ここで不合格の頃は「江戸検定は漢字検定も含みか」と怒ったものですが、一級ならこの辺の正確さが望まれるのです。

この問題は今回の中で最も正答率が低く14%でした。答える側としての評価は非常に高い良い問題でした。

【問71】「京都町奉行所与力だった神沢杜口の『翁草』には、幕府は享保20年(1735)に諸大名に命じて、家臣の難しい姓名の者を書き出させたとあります。では、このときに出てきた姓名として『翁草』に記されていないものは、次のうちどれでしょう？」

い）一二三四　　ろ）小助助助

は）谷谷谷谷　　に）平平平平

えー、変な問題だ、江戸の文化歴史を検定するのにふさわしい問題とはとても思えない、ばかばかしい問題です。17%と前述の【問100】に次ぐ低正答率でしたが何の意味もありません。

【問64】「鼠小僧の異名をもつ盗賊の次郎吉は、武家屋敷ばかりをねらい総額3,000両以上を盗みました。小石川の水戸藩邸も再三荒らされましたが、当時まだ部屋住みだった若き徳川斉昭は、鼠小僧に対してどのような反応を示したでしょう？」

い）社会が悪いと言い、世の不正を家臣に説いた

ろ）自分が捕まえようと言い、家臣と寝ずの番をした

は）水戸藩の恥であると言い、家臣に他言無用を徹底した

に）困窮しているのだろうと同情し、大目にみるよう家臣に伝えた

私の答えはxでしたが、最も優れた問題と評価したいです。テキストにある事項の丸暗記でなく、時代や人物について考えなければならない点が優れています。答えは皆さんでお考えあれ。

荷風流散策のエッセンス

寺島　玄

文豪・永井荷風は散策者としても高い評価を得ている。その成果は「日和下駄」、「元八まん」、「放水路」、「寺じまの記」などのエッセイや日記「断腸亭日乗」に結実している。それらの作品をひも解くと荷風流の散策のエッセンスが見えてくる。荷風は散策の前に知識武装をする。知識は最先端の情報とはほど遠い、ひと昔もふた昔も前の「維新」とか「震災」とか世間が大きく様変わりする前のものだ。

いざ情報を詰め込んで現地にいくと町は変わっている。知識が昔だけに町のあまりの変わりように荷風は呆然とする。普通はそこであきらめる。だが荷風は違う。再び知識武装し町に出る。そして、また裏切られる。そのうちに遂に「名残り」や「面影」に出会う。そのときの喜びはいちど落胆しているだけに大きい。荷風はこうして今と昔の落差を作り出し時空旅行を楽しむ。

荷風は目的地までのプロセスにもこだわる。戦前麻布に住んでいた頃、たとえば荒川放水路に出るのに、まず坂を下り、閑静な住宅地をあとにする。市電で銀座を過ぎ、隅田川を渡り、大横川を越え、バスに乗り換えて工業地帯を通過し、ようやく荒川のほとりにたどり着く。荷風は地勢の変化や川・坂などの地理的条件を活かし距離感を演出する。おおむね目的地に急行せず交通機関にもこだわりをみせる。戦後市川に移り住んだ荷風は毎日のように浅草に通う。市川から浅草に行くには総武線で浅草橋に出てから都電を使うのがいちばん早い。だのに荷風はわざわざ当時押上止まりの京成電車を利用する。おそらくは押上駅が頭端式の（上野駅の13番線のような先止まりのホームでその先に改札口がある）つくりで、同駅の改札が千葉方面から都心に上る荷風にとって、「東京に来た」と実感できる「仕切り」となったからではないか。このように荷風は地勢や交通事情の機微を突き「小さな旅を大きく」していく。

荷風はしばしば江東の陋巷（ろうこう）を散策した。大作家であり慶應義塾大学の元教授で、しかも山の手人である荷風は下町の陋巷にあってはしょせんエトラン

ゼ（異邦人）である。荷風はそんなエトランゼのまなざしで、「そこに住まう人が見過ごしていた何か」を見つける。町が気にいると何度も通いつめる。だが結局は山の手のすみかに帰らねばならない。親しんだ町を去る荷風はときに「冷たい」と評される。だが私は「せっかく親しんだ町を去らねばならない荷風にすればさぞ悲しかっただろう」と一抹の哀愁を覚えてしまう。荷風流散策は巧妙でいて奥深く、そしてちょっぴりほろ苦い。

志ん生の大津絵「冬の夜」と「消防殉職者慰霊祭」

菅　沼　和　男

前号の『えど友』に早川良躬さんが由緒ある「町火消」について投稿されていました。文中「すわ出火と聞けば半纏に纏、梯子を押し立て出動」のくだりで古今亭志ん生がうたった大津絵「冬の夜」を思い出しました。天皇陛下の皇太子時代、教育係を務めた小泉信三（慶應義塾大学の元塾長）が自宅に招いた志ん生の「冬の夜」を聞いては涙を流したと以前本で読み、買い求めたそのテープを今回久しぶりに聞いてみました。半鐘が鳴ると刺子の襦袢（志ん生はこの言葉を使っています）をサッと身につけて、火事場へと急ぐ町火消。家に残る女房は亭主の無事をただただ願い、念仏を唱えて帰りを待つその切ない気持ちを志ん生はうたい上げています。最後は「もしも生まれた子が男の子ならわたしゃお前の商売させやせぬぞえ、罪だもの」で終わります。「火事と喧嘩は江戸の華」といわれますが、危険をも省みない町火消は江戸の庶民にとっては何とも力強い味方だったのでしょう。その陰で火消の女房の苦労は並大抵のものではなかったことがこの「冬の夜」からうかがえます。

＜参考＞「古今亭志ん生名演集29・子別れ、大津絵―冬の夜」

▲消防殉職者慰霊祭（筆者写す）

三社祭の熱気もようやく収まりかけた５月下旬、浅草寺裏の境内では江戸消防記念会の「殉職者慰霊祭」が毎年執り行われています。慰霊祭の一連の式が終わると十一区八十七組、約800人の江戸消防記念会の会員が半纏を着て木遣りをうたい、それぞれの組の纏を右に左へと力強く振り揚げて登場します。やがて青竹で作った真新しい梯子を五月の空に向けて勢いよく立て、梯子乗りの妙技が次々と繰り広げられる様はこれぞ粋でいなせな江戸の風情です。ぜひ一度、カメラ片手に出向かれることをお勧めします。どなたでも自由に見ることができます。浅草には手ごろでうまい店がたくさんあります。食事でもしてしばし江戸情緒の余韻に浸ってください。

慰霊祭（大雨の場合は梯子乗りは中止）
日時　５月25日(金)　午前11時
場所　浅草寺裏の境内

曲亭馬琴の『羈旅漫録』より

佐　藤　幸　彦

享和２年(1802)５月９日に曲亭馬琴は江戸を発ち、名古屋、京都、大坂、伊勢を回り、８月24日に帰着して、その旅行記『羈旅漫録』を発表しました。江戸時代の紀行文学は多くありますが、東海道は名所旧跡も広く知られており、旅人を受け入れる施設や乗り物も完備に近く、未知の土地に身を置くスリルもないので、紀行には余り面白い物がないようです。その中でこの旅行記は結構読ませるものがあります。

三河の岡崎の少し先の木綿問屋の豪家で、雨戸のふし穴から一尺ばかり離して紙を押し当てると庭の景色が鮮明に見え、遊ぶ子供の目鼻、衣服の模様まで鮮明に見えた。但し上下が逆さまだった。信州上諏訪の薬師堂の裏のふし穴からも塔の影が映り、また京都の大宮通りの百姓丹羽又左衛門の、納戸の節穴に紙をかざせば東寺の塔が映ると言われる。これはどこででも起こりえる現象だが、うまい所にふし穴がなく、または人がふだん行かぬ所に起こっている現象なのではないか？

馬琴は全国３ヵ所の事実を組み合わせて普遍の原理を推測したというわけです。これは現代だったら、針穴写真機（ピンホールカメラ）として小学校の理科実験でも経験することでしょう。この実験は案外手数がかかります。それは感光体の感度を選ぶ必要があることと、出来た画像は白と黒が逆転した、いわゆるネガになってしまうので、反転現像という暗室作業が必要になることです。

昭和30年代に、あるカメラ雑誌が針穴写真機による作品コンクールを開催しました。写真としても優れていて、普通のカメラでは撮れない写真を募集したのです。その特選作品を今でも覚えています。大阪駅の正面(梅田口)の写真でした。作者は阪神百貨店の上から撮ったもののようです。現在のような歩道橋は全く無く、歩行者、市電やバス・タクシーなどがひしめいていました。作者はここで感光体として、感度の低い白黒の印画紙を用いて２時間の長時間露光をかけました。どんな写真が出来たでしょう。人の波、交通機関等、あらゆる動くものは流れ(ブレ)てしまって、駅舎と電柱ぐらいが有る、静の世界が現出する、と作者はふんだのですが、おっとどっこい、写真の中央に座って、お金を受ける帽子を前に置いた、たった一人の人が鮮明に映り込んでしまいました。これは作者の意図に反した作品なのですが、見事特選となったのです。

落語で
江戸散歩…㉕

［加賀の千代］

階段を下りて入る薬王寺

加賀の千代

この落語は大晦日にやりくりのつかなくなった甚兵衛が女房の入れ知恵で隠居のところに借金に行く話です。おまえさんは隠居にかわいがられているから何とかなるという女房に、甚兵衛は「子でも孫でもないのに」というと、世の中にはいろんなものを可愛がる人がいると女房。加賀の千代という人は「朝顔につるべ取られてもらい水」という句を詠んだくらい、朝顔を可愛がったといいます。だからおまえを可愛がる人だっているんだ、隠居に何とかしてもらいなというわけです。

隠居のところへ行った甚兵衛はあちこちボロを出しながらも借金に成功します。喜んだ甚兵衛が、やっぱり「朝顔につるべ取られてもらい水」だというと、隠居が「加賀の千代か」、甚兵衛が「いやぁかか（女房）の知恵です」で下げとなります。私の子どものころはラジオでよく聞いた落語ですが、今はあまり聞かれなくなったように思います。おそらく、つるべのついた井戸などほとんどなくなって、句の意味の説明がややこしいからではないかと思います。

今回は、その句を詠んだ井戸が現存するお寺があるというので、行ってみることにしました。

▲元和キリシタン遺跡

出発はJR「田町」駅、三田口（西口）から、そのお寺・薬王寺を目指しますが、途中何カ所か寄り道をしながら行きます。

札の辻、キリシタン遺跡など

駅前の大きな道が国道15号（第一京浜）で、これを品川に向かって右側を進みます。するとすぐ大きな交差点に出ますが、ここが「札の辻」です。案内板によると江戸時代のはじめ高札場がここに設けられ「札の辻」と呼ぶようになり、その後天和3年(1683)高札場が南方の高輪に移されて「元札の辻」と呼ばれるようになり、明治維新後は「元」を略してまた「札の辻」となったのだそうです。

「札の辻」交差点を渡るとすぐ右に三田ツィンビル西館という高層ビルがあります。その手前、公園のようになっているところの幅の広い階段を上るとその先に「都旧跡　元和キリシタン遺跡」という標柱と東京都教育委員会による説明板が目に入ります。三代将軍家光が元和9年(1623)、キリスト教信者約50人を処刑した場所です。寛永15年(1638)にも同じ場所でキリシタンが処刑されています。

▲薬王寺の入口

この遺跡を見て左へ曲がると通行用エレベーターがあり、向かいの丘の上へあがることができます。もっとも「事件、事故の責任は負いません」と表示があったり、あがった先が済海寺の墓地裏で少々気味が悪いのですが、道なりに行くと聖坂の上に出ます。その先すぐ左側が港区立亀塚公園です。ここは上野沼田藩土岐家の下屋敷跡で亀塚伝説が残されています。亀塚は古墳とみられているものの確証はないようです。武家屋敷風につくられた塀が雰囲気を感じさせます。そのすぐ先にも三田台公園があり、こちらは伊皿子貝塚遺跡です。

▲朝顔の井戸

いよいよ朝顔の井戸へ

この三田台公園の前で道が二股（また）に分かれているので右へ入ると右手に薬王寺が見えてきます。「史跡　朝顔の井戸」と大きく書いてあり、すぐ分かります。普通お寺は階段をあがって本堂というところが多いのですが、ここは階段を下りて本堂、さらに一段下りたところが墓地となっています。その墓地の真ん中に朝顔の井戸はありました。

確かにつるべのついた井戸があって、石碑もありました。その上半分には例の句が刻まれていて、下半分には次のような文面が刻まれていました。「朝顔の井戸　俳人加賀の千代女の朝顔に云々の句由縁の井戸也　又江戸三大火の厄を免れたるにより火防感応高祖と共に霊水の名聞こえ高し　敬白」

近くにつるべにからみそうな朝顔は見当たりませんでしたが、この井戸かと得心がいきました。

これでこの日の目的は果たしたわけですが、もう少し歩いてみます。三田台公園へ戻り、その先を左折して幽霊坂を下るとおしろい地蔵（御化粧延命地蔵尊）の玉鳳寺があります。幽霊坂を抜けて左へ行くと魚籃坂下です。このすぐ左が大信寺で江戸の三味線製作の祖・石村近江の墓があります。三味線寺というこの寺に「音楽葬、散骨飛行」のビラがおいてあったのには驚きました。そのまま魚籃坂、伊皿子坂を行って、最後は泉岳寺の「首洗井戸」で井戸の散歩を締めました。

【取材】歩いた人（文・写真・イラスト）：
広報部会・松原良

催事案内

古文書講座

新年度は５月から開講

古文書講座の新年度第１期は５月から下記日程で開講します。申込はがきは１講座ごととして、**申込の受付は３月末まで**です。多数の皆さんのご参加をお待ちします。

◆入門編

- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教／近世の門跡寺院を中核とした朝廷史・仏教史・文化史を研究)
- 開催日：5/2(水)、6/6(水)、7/4(水)

◆初級編

- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻／最近の研究テーマ：将軍姫君の儀礼上の贈答関係の範囲など)
- 開催日：5/16(水)、6/20(水)、7/18(水)

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻／最近の研究テーマ：朝幕関係史特に近世後期の朝廷と幕府の関係)
- 開催日：5/19(土)、6/16(土)、7/21〈土)

- 時間：A講座は 10:30 ～ 12:30
  P講座は 14:00 ～ 16:00
  (注意)**A講座かP講座かの希望を申込時に明記**
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室または学習室 1,2
- 定員：各講座とも 80 人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回 1,500 円(初回一括払い)

◆ 23 年度第３期の残日程

入門編 3/7(水)、初級編 3/21(水)、中級編 3/17(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会セミナー

第 115 回「忘れそうな江戸東京ことば」

講師　林えり子さん（慶應義塾大学文学部講師）

◆江戸は開府当時、植民地状態でしたから御府内といっても各地の方言が飛び交っていました。それから百余年後の元禄時代、独特な江戸人気質が顕著となると同時に江戸ことばが成立します。それが西軍の制圧によってすんでのところで消滅しかけますが、駿府に逃れてのちに東京に戻った根生いの人たちのお蔭で辛うじて生きながらえます。その「忘れそうな江戸東京ことば」についてお話しいただきます。

○講師略歴：はやし・えりこ

昭和 15 年(1940)、東京本郷区湯島生まれ。根生いの十四代目。慶應義塾大学文学部卒業。出版社勤務。現在、日本文芸家協会等会員、ＮＨＫカルチャー等講師、慶應義塾大学文学部講師。著書は、『川柳人・川上三太郎』(河出書房、第 11 回大衆文学研究会賞受賞)、『生きている江戸ことば』(集英社新書)、『江戸御府内八十八ヶ所・東京遍路・大江戸めぐり』(主婦の友社)など多数。

- 開催日時：３月 24 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：３月 15 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

第 116 回「江戸の時刻制度と和時計」

講師　佐々木勝浩さん（和時計研究家）

◆「和時計」は、日本で日本の時計師により、製作された機械時計で、当時使われていた不定時法の時刻を表示するように工夫された時計をいいます。大都市東京の前身「大江戸」の秩序と発展をもたらしたもののひとつ「時刻制度と和時計」に焦点を当てて、語っていただきます。長年の時計コレクション経験と時刻制度の歴史研究による興味深いお話をお伺いできるとともに、改めて江戸のもの作りを考える良い機会と思われます。

○講師略歴：ささき・かつひろ

昭和 16 年(1941)、大連生まれ。東京理科大大学院理学研究科物理専攻修士課程修了。専門は科学技術史(時刻測定の歴史、時刻制度史)。昭和 53 年(1978)国立科学博物館理化学研究部研究官、平成８年(1996)同館理工学研究部長などを経て、現在は、国立科学博物館名誉館員・名誉研究員。著書は、『加賀藩垂揺球儀発見びっくり仰天記』共著、『歴史学事典･第 14 巻ものとわざ』(弘文堂)など。他に、グラスハープ奏者としても活躍中。

- 開催日時：４月 28 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：４月 19 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第 117 回「新川、小名木川・塩の道」

講師　土屋信行さん（えどがわ環境財団理事長）

◆江戸が開府され人々が集まってくると必要になったのが水、米、塩です。江戸はこれらの重要な物資をどのように安定供給し続けられる体制を作り上げたのでしょうか。水については玉川上水を始めとした江戸の水道網です。今回は、米と塩を運ぶ大動脈となった新川、小名木川に象徴される江戸の舟運路の成り立ちに注目し、併せてこれを実現するうえで最も重要な利根川東遷事業を紹介していただきます。

○講師略歴：つちや・のぶゆき

技術士(建設部門・総合技術監理部門)、土地区画整理士。1975 年東京都入都。2003 年より江戸川区土木部長。2011 年公益財団法人えどがわ環境財団理事長。環状七号線、環状八号線の建設・設計、六町駅土地区画整理事業に従事。中でも、秋葉原および汐留再開発事業のまちづくりには深くかかわった。現在、東日本大震災の復興まちづくり検討の学識経験者委員として、宮城県女川町の復興に取り組んでいる。

- 開催日時：５月 18 日(金)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：５月７日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

見学会

「広重『名所江戸百景』周辺探訪―その６(深川木場・門前仲町周辺)―」

◆この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪します。探訪では広重『名所江戸百景』の世界にタイムスリップし、江戸の町の成立や発展、人々の生活や声などを身近に感じていただければ幸です。今回は、西大島から小名木川を渡り～東陽町～木場～門前仲町までを歩きます。眼光鋭く、獲物を狙う大鷲(おおわし)の迫力と、眼下の荒涼とした下界の広さが、見る人をひきつけたという浮世絵「深川洲崎十万坪」や、雪の降りしきる静寂のなか、材木を操る川並の鳶口の音のみが、聞こえてきそうな浮世絵「深川木場」などを訪ねます。所要時間は約４時間、東京メトロ東西線「門前仲町」駅で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『五百羅漢さざゐ堂』『小奈木川五本まつ』『深川洲崎十万坪』『深川木場』『深川三十三間堂』『深川八まん山ひらき』

- 開催日：3 月 25 日(日)12 時 45 分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：都営地下鉄新宿線「西大島」駅Ａ４地上出口
- 申込締切：3 月 15 日(木)必着
- 定員：150名､同伴者可(はがきに氏名､住所､電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも 500 円(当日払い)

【企画担当責任者】 山本隆(事業部会)

「再訪　江戸四宿を歩くー内藤新宿」

◆好評の江戸四宿をめぐる旅も、今回の内藤新宿で最後となりました。江戸時代の面影を残す品川、千住、板橋の宿と違い、巨大な繁華街、ビジネス街へと変貌した現在の新宿では、その面影を探すのは容易ではありません。しかし信州高遠藩内藤家中屋敷だった新宿御苑はもちろん、多武峯内藤神社、玉川上水跡、四谷大木戸跡、長善寺、太宗寺、正受院、成覚寺、花園稲荷神社、天龍寺など、探してみると内藤新宿ゆかりの場所が結構あります。そんな場所をめぐりながら、宿場時代をしのびます。

- 開催日：4 月 22 日(日)12 時 30 分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：四谷地域センター（新宿区内藤町 87)
  東京メトロ丸ノ内線「新宿御苑前」駅から四谷方向へ徒歩５分、新宿御苑大木戸門すぐ前
- 申込締切：4 月 12 日 (木) 必着
- 定員：150名､同伴可(はがきに氏名､住所､電話番号連記)
- 参加費：会員・同伴者とも 500 円(当日払い)

【企画担当責任者】野川陽一(事業部会)

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく!

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展
「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」

会　期　2月21日(火)～5月6日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし4月30日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ(前号の予告「中学生以下は無料」は誤りでした)。
※関連企画として特集展示「太陽の塔 黄金の顔」開催中
会　期　2月21日(火)～5月20日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし4月30日、5月7、14日は開館
会　場　常設展示室5階　朝野新聞社前および東京ゾーン「よみがえる東京」コーナー

次回予告

●特別展
「日本橋～描かれたランドマークの400年～」

会　期　5月26日(土)～7月16日(月・祝)
休館日：毎週月曜日、ただし7月16日は開館
会　員：一般500円、65歳以上250円、大・専門生400円
同伴者：一般800円、65歳以上400円、大・専門生640円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1名のみです。

企画展のご案内

●企画展
「芝増上寺～秀忠とお江の寺」

会　期　3月27日(火)～5月27日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし4月30日、5月7、14日は開館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

会報＜えどとも＞第 66 号
平成 24 年 3 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、前田太門、五十島正修
発行：江戸東京博物館友の会
〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910